日本記者クラブ会報

第244号
1990年
（平成2年）
6月10日発行

東京都千代田区内幸町二ノ二ノ一
日本プレスセンタービル　〒100
© 社団法人　日本記者クラブ
電話 五〇三―二七二二（代）

厳戒下で盧大統領昼食会

クラブ賞授賞式行われる

「またクラブを訪問することができました」
水上理事長と握手する盧韓国大統領（5.26）

手を振りながら去っていく盧泰愚大統領を見送りながら、爽やかな感動が心の中に残った。日本記者クラブとして初めて迎えた韓国大統領。五月二十六日の昼食会で盧大統領は、にじみ出る人柄と穏やかな口調で満場を魅了した。

日本記者クラブを訪れるのは、盧大統領の強い意向だったという。まだ大統領候補だった二年八カ月前の八七年九月、盧さんはクラブを訪れて

「韓国大統領としてこの場所を再度訪問する」

と約束、その言葉を守ってくれた。

極左から極右、さらに北の反対。不穏情報も飛びかう中での訪日だけに、クラブも厳戒態勢の渦に巻き込まれた。訪日が正式に発表されるのが待ちきれぬように、五月初めから次々に韓国側の先遣隊が訪れ、警備当局、外務省とも連日協議が続けられた。

警察側としては、最初、当クラブの会員も、昼食会出席者は外務省発行のIDカードを付けるよう要求した。しかし「日本記者クラブは会員が組織。会員が資客として招待する以上、会員証が優先する。ダメならば主催はお断りする以外にない」と拒否、結局、クラブの主張が通った。

金属探知機まで持ち込まれての二重、三重のチェックに、当日はさぞ不愉快な思いをされた方々も多いと思う。日本プレスセンタービルの全テナントにも、事前の検索その他、ご迷惑をおかけした。ここでお詫び申しあげるとともに、ご協力に感謝したい。

水上理事長が、会の最後にご披露したように、盧大統領の記念署名は「真実一本」。韓国関係者に聞くと、真実に向かって一筋にという意味と真実はただ一つという両方の意味にとれると言う。盧大統領が「韓日両国が歴史の真実を共通に認識することができた」と力説していたことを考えると、後者の意と解した方が良いと思うのだが。

本来なら真っ先に報告しなければならない日本記者クラブの第三六回総会は、前日の二十五日に開かれ、八九年度の事業報告と収支決算、ならびに剰余金処分を審議、理事会案通り承認した。収支決算の詳細は4ページを参照されたい。

総会の議事終了後、九〇年度日本記者クラブ賞に輝いた諏訪正人（毎日）、吉田直哉（NHK）の両氏に対する授賞式が行われた。

引き続いて十階ホールで、曽野綾子さんの記念講演「表現と時代」があり、そのあと、九階宴会場で会員懇親会が開かれた。諏訪、吉田両氏が紹介され、それぞれユーモアを交えてあいさつし、にぎやかに会が進められた。

（事務局長・白木　東洋）

「乾いた雑巾」をしぼる

諏訪・吉田両氏に

以前、加藤芳郎さんにどうやって仕事をなさるのですかと聞いたことがある。

『まっぴら君』の作者はしばらく考えてから、手もとにあったおしぼりを取っていった。

「こうやってしぼるんです。ただし、おしぼりではなく、雑巾、それも乾いた雑巾を」

乾いているから、しぼっても水は出ない。それでもしぼる。渾身の力を込めてしぼり続ける。するとそのうち、ぽとりと一滴、水がしたたり落ちる。その水滴が案（アイデア）なのだと加藤さんはいう。余録を書き出して、加藤さんのいう意味がよくわかった。自分という雑巾をしぼりにしぼらなければ、ろくな文章は書けない。ものを書くとは、己をしぼり出すことではないだろうか。

その後、加藤さんにお目にかかるたびに雑巾の話をする。いや、しぼってもいい水が出なくて、とぼやくと、このしぼりの達人は「雑巾は乾いていなくてはいけません。濡れていてはだめ」とおっしゃる。濡れ雑巾なんて、手に取るだけでぼたぼた水が落ちる。そんなきたない水は使いものにならない、というわけだ。

諏訪正人氏

よし、きょうはひとつ、やってやるぞ、などと意気込んでとりかかった文章がいい出来だったためしはない。濡れ雑巾だからだろう。己を無にし、つまり自分をからからに乾かさねば、満足のいく文章は書けない。一切の野心も、思惑も捨ててかかること、これが加藤さんから学んだ貴重な教訓だった。

己を無にするといえば聞こえはいいが、この仕事をやってみて、自分がなにも知らないことにつくづく思い至った。最初から無だったのである。政治、外信、学芸などの部を回り、外国に行って、いっぱしものを知っていると自分では考えていたが、錯覚にすぎなかった。余録を担当しなければ、知らないということさえも知らなかっただろう。知らないということを知ったことが、余録記者としての最大の余禄だった。

知らないから調べる。人の話を聞く。本を読む。それが実に楽しい。ああ、こういう見方があったのか、こんな人生があるのかと毎日、感心し、感嘆している。雑巾は乾いているから、知らないことが染み通っていく。昔は濡れていたから、染み込まなかったのだろう。

「書くということは驚くということだ」とロラン・バルトはいった。驚きとは発見と言い換えてもいいだろう。世界の動き、人間の営み、自然の移ろい、世は驚きに満ちている。これからも驚き続けていきたい。そんな私に、日本記者クラブ賞は思いもよらぬ大きな驚きでした。こんな驚きを与えてくださったことに心から感謝します。

諏訪　正人氏（すわ　まさと）**略歴**

一九三〇年生まれ、東京都出身。東京大学文学部仏文科卒。五二年毎日新聞入社。日本人初のブノンペン常駐特派員、ジュネーブ、パリ各支局長、学芸部長などを歴任。七八年論説委員となり、役員待遇を経て八七年から論説室顧問。七九年四月以降「余録」を担当、現在に至る。

主な著書に『余録』『余録Ⅱ』、ほかに諏訪正の筆名で『ジュヴェの肖像』『コクトー　円卓の騎士』『ジロドゥ　ソドムとゴモラ』など多数。

ブノンペン特派員時代「公正な報道によって、日本、カンボジア両国の親善に寄与した」として、シアヌーク元首から勲章と銀杯を授与された。

趣味は、レーザーディスクでのオペラ観賞。

1990年度日本記者クラブ賞

「胸痛む」光栄です

吉田直哉氏

光栄です。まことに有り難いことだと思っています。しかも、この立派な賞を番組のディレクターがいただくのは初めて、ということですから感激もひとしおです。

しかし、ひとりでも、紙と鉛筆があればすぐれた仕事のできる記者の方々とちがって、テレビの番組をひとりでつくることができないのは、言うまでもありません。少なくとも、カメラマンとの二人三脚から、すべてが始まります。

私の場合、いままでつくってきたすべての番組のおかげで、名誉あるこの賞をいただけることになったのですから、ほんとうは大ぜいとの連名のはずです。それを、個人名で独占するのです。申し訳ないと、心から思います。

でも、そんな理由で「胸痛む」という形容詞を、題名に使ったわけではありません。それだけでしたら、「うしろめたい」というようなことを書きます。

では、何に胸が痛むのかと申しますと、もっと大きな、天下国家を超えるような事に対してなのです。受賞理由に「一貫してテレビドキュメンタリーの新ジャンル開拓に大きく貢献、常に社会的な問題を先取りしてきた」と過分なおほめの言葉がありました。そこで「先取りとは、直接的にはきっと五年前のあの取材のことにちがいない」と考え、そこでとりあげた問題がいま、ますます深刻になっている事実を思い出して、胸を突かれる思いを味わったのです。

五年前に放送した『21世紀は警告する』というシリーズの、第一回のタイトルは、「祖国喪失」でした。リトアニアやアルメニアがその回の舞台で、いまもそこに住む人びとと、そこから他国に逃れた人びとが、その回の主役だったのです。

少数派と多数派の対決、そして少数派の突然の多数派への移行。絶えざるウォッチングがなければ説明もできない「マジョリティー・シフト」が、今世紀末の最大の問題になる、と思っての取材でした。

同じシリーズの、「砂漠か洪水か」という回では、アマゾンの熱帯降雨林が毎年、日本の四国の面積ぐらいずつ消滅しつつある、それが生命体としての地球の、とりわけモンスーン地帯の気候に、どんな大きな影響をもたらすか、という検証をしました。

しかし、反響はきびしいものでした。「大金をかけてなぜ日本と全く関係がない国の取材をするのか」とか「またオオカミが来た！のお騒がせ番組がはじまった」というような酷評が多かったのです。

ところが、わずか五年後――。

リトアニアもアルメニアも、世界のニュースの焦点となり、熱帯降雨林の現状も、最大の話題です。

胸痛む素材ゆえ光栄に浴した上、オオカミ少年にあらずと保証もしていただいたので、さらに奮励努力しようと決意しています。

吉田　直哉氏（よしだ　なおや）**略歴**

一九三一年生まれ、東京都出身。東京大学文学部西洋哲学科卒。五三年日本放送協会入局。テレビドキュメンタリー「日本の素顔」「現代の記録」シリーズを担当。七三年NHKスペシャル番組部創設後は、「未来への遺産」シリーズ、「ポロロッカ～アマゾンの大逆流～」「21世紀は警告する」シリーズなど、数多くの大型ドキュメンタリーを企画、演出した。

六九年、「明治百年」で芸術選奨文部大臣賞を受賞。

主な著書に、『テレビ、その余白の思想』『私のなかのテレビ』など。

趣味は仮面の収集。

第36回通常総会

（五月二十五日(金)　クラブ記者会見室）

社団法人日本記者クラブの第三六回通常総会は、出席法人会員三七社、委任法人会員九五社、計一三二社の出席をもって成立（定足数七三社）、定款第二三条により、水上健也理事長が議長となり、午後三時三十分からクラブ記者会見室で開催された。

八九年度事業報告（前号既報）、同収支決算（別表参照）ならびに剰余金処分を理事会案通り承認した。この結果、二五、八二八、三三一円の剰余金は、九〇年度予算の予備費に追加計上されることになった。

また、創立二十周年記念事業の費用（別表参照）を、第一六〇回理事会（89・9・8）の決定に従い、特別積立金から支出したことが報告された。

1989年度収支計算書

自　1989年4月1日
至　1990年3月31日

科目	予算額	実算額
〈収入の部〉	円	円
前年度繰越金	23,606,080	23,606,080
プレス会員会費	199,884,000	203,183,100
法人会員会費	125,184,000	125,184,000
個人会員A会費	30,336,000	31,241,100
〃 B 〃	2,052,000	2,223,000
〃 C 〃	12,144,000	12,920,000
〃 D 〃	30,168,000	31,615,000
賛助会員会費	47,208,000	46,965,500
法人賛助会員会費	35,520,000	35,240,000
個人 〃 〃	5,904,000	6,110,900
特別 〃 〃	5,784,000	5,614,600
貸室料	31,380,000	29,887,605
雑収入	25,932,000	25,413,099
特別収入	17,856,000	17,931,912
施設機器賃貸料	1,824,000	2,160,000
受取利息・その他	6,252,000	5,321,187
保証金戻り	14,400,000	14,406,294
計	342,410,080	343,461,678
〈支出の部〉		
事業費	192,828,000	193,821,498
借室維持費	157,128,000	159,097,180
借室料	122,400,000	126,362,244
共益費	19,824,000	20,012,240
空調・光熱・水	14,904,000	12,722,696
会議室	2,640,000	2,039,641
事業運営費	13,200,000	14,507,207
会報発行費	12,300,000	11,385,145
運営雑費	1,560,000	1,732,231
通信費	2,400,000	1,932,995
印刷費	3,000,000	2,794,179
交通費	600,000	332,920
管理費	18,864,000	18,038,192
クラブ管理費	13,224,000	13,387,334
機器備品費	1,320,000	462,318
消耗品費	1,920,000	2,102,280
事務委託費	1,560,000	1,560,000
事務雑費	840,000	526,260
人件費	87,276,000	92,155,716
給与	51,720,000	52,802,650
賞与・諸手当	34,116,000	37,882,925
厚生費	1,440,000	1,470,141
諸積立金	7,800,000	7,800,000
資産準備積立金	4,200,000	4,200,000
退職準備積立金	3,600,000	3,600,000
予備費	35,642,080	5,817,941
計	342,410,080	317,633,347
収支差	0	25,828,331

財産目録

1990年3月31日現在

資産の部		負債の部	
科目	金額	科目	金額
繰越剰余金の部	円		円
現金・預金	13,806,023	仮受金	7,500
仮払金	200,000	預り退職準備積立金	37,962,103
立替金	20,539,012	預りクラブ資積立金	28,103,504
未収会費	7,009,300	預り資産準備積立金	101,083,339
退職準備積立預金	37,962,103	預り特別積立金	51,555,755
クラブ資積立預金	28,103,504		
資産準備積立預金	101,083,339	繰越剰余金現在高	41,546,835
特別積立預金	51,555,755	（内当期剰余	25,828,331
小計	260,259,036	小計	260,259,036
繰越通常財産の部			
保証金	131,164,600		
敷金	24,561,232		
内装	55,529,815		
什器備品	17,991,471	繰越通常財産現在高	229,247,118
小計	229,247,118	小計	229,247,118

期末正味財産現在高　270,793,953円

創立20周年記念事業

〈支出〉	
記念出版物関係	8,259,314円
記念パーティー	3,587,320円
雑費・その他	1,208,649円
計	13,055,283円

会員懇親会（5・25）

この日は、多忙な一日でした。第三六回総会、クラブ賞授賞式、総会記念講演と、〝厳粛な〟クラブ行事が続いたうえ、翌日の盧泰愚大統領昼食会の準備のため、日本プレスセンタービル全体がざわついていました。

夕方五時半、外の〝けんそう〟を離れて会員懇親会がにぎやかに始まりました。まず水上理事長が「二十一歳になったクラブのますますの繁栄を祈って」と乾杯の音頭をとった後、九〇年度クラブ賞受賞者の諏訪正人さんと吉田直哉さんを紹介しました。お二人とも晴れやかな顔で壇上へ。会員から温かい拍手が送られました。それぞれユーモアを交えて受賞の喜びを語りました。

「激戦の中から、お二人が選ばれました」と諏訪(中央)、吉田（左）両氏を紹介する水上理事長

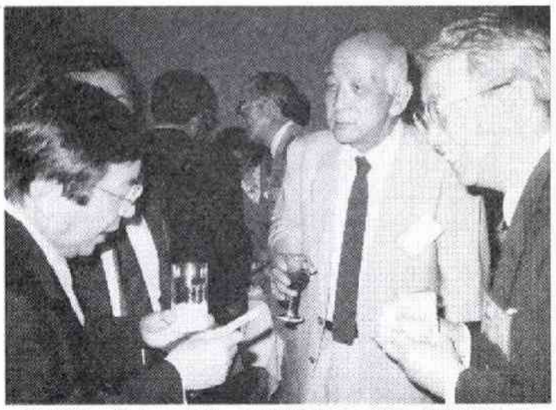
大柄な諏訪さんは「余録の前身『硯滴』ができたのが一九〇二年、私が担当して十一年。八分の一しか書いていないので、まだまだ駆け出しです」と謙そん。「ジャーナリストの語根はラテン語の『リエス(一日)』だそうです。私はきょうのことしか考えない古典的ジャーナリスト。明日書きたいことはきょう書いてしまう、その日暮らし。そんな古典的ジャーナリストが賞をいただき、とても光栄です」と。そしてコラムニストは〝マゾヒズムの気〟があると笑い、「自分をいじめればいじめるほど、違う音(ネ)が出てくる。この機会にもっといじめていいコラムを書きたい」と抱負を語りました。

テレビドキュメンタリーの第一線で活躍、話題作、問題作を制作してきた吉田さんは、「テレビはチームワークの仕事。私は大勢の仲間の代表です。その中で私なりの目標は、映像を、現実を伝えるだけでなく、ものを考える道具にしたいということでした」。〝NHKに吉田あり〟と言われた〝鬼ディレクター〟のイメージとは違い、小柄でソフトタッチ。職場結婚した奥様を同伴しました。奥様からみた吉田さんは「いつも何かに驚いている少年のような人。一年の四分の三は取材で留守にしていましたが、仕事が楽しくて仕方がないという感じでした」。

戯曲の翻訳家でもある諏訪さんと、大河ドラマの「太閤記」や「樅ノ木は残った」等も演出した吉田さん。ワインを片手に話題は演劇へと広がります。お二人の同僚も加わり、取材上のエピソードや苦労話など〝知的刺激〟に満ちた会話が続きました。

お酒も入り会場内はさらににぎやかに。会員のこの日の話題は、もっぱら前日の宮中晩さん会で述べられた天皇の「お言葉」問題。日韓関係や歴史上の認識問題など持論、時論さまざま――。総会記念講師の曽野さんも、ずっと立ちどうしで七時近くまで会員と懇談してくださいました。

諏訪さん（左）は昨秋からワープロ派に転身。村尾清一さん（81年度クラブ賞）としばしワープロ談義



牛山純一さん（中央・84年度クラブ賞），深川諏会報委員長（右・テレビ東京）もお祝いに

大日向会員（日経OB）と談笑する曽野さん

とっておきの話

街頭座談会と第一回「新聞週間」

松下功

わが家の古いアルバムに黄色くなった一葉の写真がある。スピグラで撮った写真だ。裏には「二ダン半」と書いてある。その写真の真ん中に、口をタコのようにとんがらせた男が、群衆に囲まれて立っている。片手に原稿用紙を持っている。若き日の私である。

松山市の中心にある〝市駅前のターミナル〟だった。終戦直後の風景である。群衆の多くが戦闘帽をかぶっている。古びた軍隊のオーバーを着ている。中折れ帽にインバネスを羽織った人もいる。四角い大学帽の学生もいる。イガグリ頭の少年もいる。白いマスクで顔が半分隠れている人も数名いる。女性の姿は少ない。

愛媛新聞社の若き社会部員だった私が、デスクに『街頭座談会』をやりたいと申し出た。昭和二十三年二月十日、片山内閣崩壊の日である。厳冬の寒い昼下がりだった。やるのなら市駅前の街頭だ。ヤミ市の盛んなころだった。私は戸板を一枚担いで、写真部の先輩に白損紙を持ってもらった。ターミナルの一角に戸板を立て、白損紙を張って『街頭座談会』と大書した。テーマは「新内閣に何を望むか」――街を行く人々が不思議そうに近寄って来た。私は大声を張り上げた。

〝愛媛新聞社の街頭座談会です。皆さんのご意見を聞かせて下さい。皆さん、集まって下さい〟

当時、NHKの『街頭録音』が人気を集めていた。もちろんラジオである。民放もテレビもない。当時のマスコミはペラ（二ページ）の新聞とNHKラジオだけだった。新聞も用紙統制の時代である。地方紙の若き社会部記者も躍進の気にあふれ、ラジオに負けてたまるものかと気負っていた。大きな重いデンスケなどいるものか、紙と鉛筆で十分だ。生の声より、もっと面白くて、記録に残る文章を作ってみせる。――その時の写真が、この黄色くなった写真である。本紙朝刊に二段半で載った写真を「お前が勇ましく写っているから、記念にとっておけ」とデスクに頂いたものである。若かりし記者時代の記念である。亡き母がアルバムに残してくれたものである。

昭和二十二年十二月五日付の愛媛新聞一面トップに、タテ六段の写真がある。NHK街頭録音『新聞にかく望む』という横カットに〝薄日射す街頭で言論の自由を〟という見出しがついている。

愛媛新聞社が全国にさきがけて始めた『新聞週間』の写真と記事である。題字の下にも「新聞週間第五日」とある。十二月四日、新聞週間にちなんで松山中央放送局が第二十二回街頭録音を松山市の中心街で実施した。私たちはそれを取材した。

映画館の前に設けられた〝街録〟ステージのラウド・スピーカーから流れる音楽が街を急ぐ人々の足を止めた。モノいいたげな顔が集まる。学生、会社員、農民、婦人などなど。二百余人が道にあふれた。壇上で熱弁が振るわれ、人の群れが笑いに動き、その中から拍手も起こる。マイクが人波の中で婦人の声をとらえる。マイクが近寄ると若い娘さんが顔を赤くして逃げ、放送員が「皆さん、マイクは恐ろしいものではありません。取って食ったり、爆発したりするものではありませんから、安心して集まって下さい」と言う。どっと表情がくずれて――一時間余り、薄日射す街角で〝言論の自由〟

を語りあった読者の声の集録。

学生、会社員が一番初めに読むのは社説だと言う。ラジオの「新聞論調」のように、他紙の社説も取り上げて、批判しあえば面白いと思う。これに対して平田愛媛新聞社長（故人）が登壇して「良い思いつきだが、自社の論調を堂々と述べるのが新聞の社説のあり方だ。そういった批判は社説以外の他の面で取り上げた方が良いと思う」と回答した。

片山内閣崩壊の日，街の声をひろう（昭和23年2月10日）

社説に次いで大きな関心を持たれているのが文化特集欄で、特に女性の声が目立った。ネンネコで子供を背負った若い婦人が「女性の向上を図る意味で、家庭婦人向けに、読書欄やニュースの解説記事を多くしてほしい」と訴え、また多くの女性から『配給ニュース』に強い関心が寄せられ、配給予告記事はもう少し早く知らせてもらいたい、配給を受けに行ったら記事が間違っていることが多い、と文句が出た。

社会面では、復員服を着た四十歳くらいの商人風の男性が元気よくステージに上がり、社会記事には暗い面がレイレイしく取り上げられて、小さい事件を誇張している傾向があり、すさんだ世相が小・中学生の頭にこびりついて、非常に悪い影響を与えている。これからは、ちょっとした美談でも、新聞が取り上げて報道し、青少年に美しい夢を持たしてもらいたいと、腕を振り上げて演説した。けいこ帰りらしい和服の娘さんも、ちょっとえくぼを見せながら「私も本当にそう思います。弟や妹の前で声を上げて読んでも、顔を赤くしないような新聞であってもらいたい」と社会面の急所を突いてきた。このほか、中学生からスポーツ記事を、農村の青年から「投書には必ず回答を」と注文がつき、高校生から「新聞の文体や用語が難しい。まだまだ封建的なものが残っている。政治や経済の用語で難解なものには解説をつけてほしい」との要望も出された。

いまNHKラジオの街頭録音の記事を読み返して、四十余年前、私がどれを、どれだけ書いたのか全く記憶がない。しかし「片山内閣総辞職」のニュースに、戸板を一人で担いで〝寄ってらっしゃい。しゃべってらっしゃい〟と、街頭に飛び出す社会部記者は、もう今の世に一人もいないだろう。私はよっぽど、NHKラジオの〝街録〟に刺激をうけ、おっちょこちょいのあまり、とっぴな取材にひかれていたのであろう。

愛媛新聞社の第一回『新聞週間』は、その翌年から日本新聞協会の新聞週間となった。だから、今でも他社より回数が一回多い。「新聞標語」も全国から二千を超える応募があり『自由な新聞　われらの公器』が一等になっている。「新聞倫理綱領」（昭和二十一年七月二十三日日本新聞協会制定）が週間中、毎日掲載されている。片山首相、伊藤新聞協会理事長の祝電をはじめ、特に奇異に感じるのは民間情報教育局長D・R・NUGENT中佐などGHQ関係者のメッセージである。その中に次のような文章がある。

日本の諸新聞が真に民主的な新聞として発展するには前途なお遠いと思う。（中略）独裁者と自由な新聞とは両立しない。このことを悟っている日本の新聞はあまり多くない。また新聞の問題に対して注意を払う日本の新聞もまた少ない。それ故に私は新聞週間は実に立派な計画であると思う。

約半世紀も前の、四国の地方紙記者の、若き日の思い出である。

まつした　いさお会員　一九二〇年生まれ
愛媛県出身　早稲田大学卒　四六年愛媛新聞入社　社会部を経て　取締役　常務取締役編集局長を務める　八一年代表取締役社長　九〇年二月から代表取締役会長

韓国 総体的難局

韓国で「総体的難局」という聞きなれない言葉が登場したのは、五月初め。与党・民自党と政府の合同会議の席上、この言葉が使われた、という。なかなかいいえて妙、というのが当方の受け取り方だった。

韓国の四、五月は毎年、何となく不安な空気に包まれる。長く厳しい冬が終わり一斉に黄色いレンギョウが咲き誇ると、とにかく無条件の解放感にあふれるせいか、韓国の政治的な大事件は四、五月に集中している。

四・一九学生革命（六〇年）▽五・一六軍事革命（六一年）▽五・一八光州事件（八〇年）……。

六四年の日韓条約反対闘争に伴う戒厳令は六月三日に出されたが、これも「五月闘争」を受けたもの。

また、近くは全斗煥前大統領の失墜を決定的にした八七年の民主化闘争も、五月の熱気を受け継いでいた。

だから、反政府で立ち上がる方も抑え込もうという方も、五月になると緊張するのである。

そこへ飛び出した「総体的難局」だからたちまち実態をもって広まり始めた。

難局の中身としてはまず国際収支の赤字転落、不動産暴騰、インフレ高進で示される経済の悪化、ついでKBS（韓国放送公社）に代表されるドロヌマ的労使紛争、治安の悪化、民自党の内紛に対する国民の不満などが挙げられよう。

五月はいつも不安で騒がしい

永守良孝

そうした何とはない不安感が流れていた所へ、盧泰愚（ノ・テウ）大統領が五月七日に「特別談話」を発表、年内に安定を回復する、と語ったことが危機論に火をつけた格好になった。ある韓国人記者によると本来、この談話は首相が国民に呼び掛けることになっていたのだが、「それでは切迫感に欠ける」というので急きょ、大統領談話に切り替えられたのだ、という。

しかし皮肉にもその直後の五月十日、民自党の党大会が開かれた日の夜、ソウルの中心街は八七年六月以来、という学生の波に覆われ、火炎瓶が乱れとび催涙ガスが都心に充満、あまつさえ、米文化センターが焼き打ちされる不祥事まで起こった。実はこの日、祝賀レセプションが行われたソウル市南部地域に警察力を張り付けたため、中心街が手薄になったのが混乱の原因だったのだが、国民には大きな不安感を与えた、といってよい。

さらに光州事件十周年を期して光州市に集まった学生は二万人に達した。

光州市は毎年この時期一種独得の雰囲気に包まれる。言ってみれば空気が帯電しており、何時落雷するかわからない、といったような感じである。そこにこれだけの学生が集結したのだから一触即発だった、といってよい。

しかし、治安当局は強制解散を自制し、学生が町中で暴れ始めるのを待って鎮圧にはいった。極めて賢明な処置で大きな混乱は防げた。

民自党のナンバー2金泳三代表は、日本人記者に対して「この国は五月になるといつも騒がしい。ちゃんと乗り切りますよ」と語ったが、盧大統領も「今はもちろん危機ではないし、総体的難局などでもない」と断言。懸案の日本訪問を成功裏に済ませた余勢をかって、与党主導の安定回復に自信をもっているようである。

そうなればよいが……というのが現場の素朴な願いである。

ながもり　よしたか氏　一九六八年毎日新聞入社　西部本社　福岡総局などを経て八四年東京本社外信部　八五年からソウル特派員

進展せず、取材陣の緊張も七カ月

中村卓司

洗い残しの食器が積まれた台所。居間のテーブルには夫婦の湯飲み茶碗と、タッくん用のビスケットが置かれていた。弁護士バッジ、現金、眼鏡など必需品も手つかずの状態だった。家庭のぬくもりを部屋に残したまま、「一家」はまさに、こつ然と姿を消した。

坂本堤弁護士一家失跡事件から約七カ月。神奈川県警の捜査が進展しない中、取材陣の緊張の毎日が続いている。

坂本弁護士（三四）が妻都子さん（三〇）、長男竜彦ちゃん（一つ）とともに失跡したのは、昨年十一月三日夜～四日未明のことだ。連絡を欠かしたことのない坂本弁護士の性格から、家族が不審に思い、数日後、自宅を訪ねたのが端緒だった。部屋は錠が掛かったままの状態。室内の状況は「外形的」にはおよそ自由意思による失跡とはみえなかった。現金が手つかずなのに対して、布団が紛失しているなどこれまで起きた失跡事件との「意味性」の違いを際立たせている。捜査員は休日返上で聞き込みに当たっているが、事件に関連する目撃証言なども極端に少ない。

県警幹部の言葉通り「何らかの犯罪に巻き込まれての失跡」「坂本弁護士の弁護士業務に何らかの関連がある」との見方は強いが、刑事訴訟法上の証拠がほとんど現場に残っていない点が捜査をさらに困難にしている。家庭や近隣とのトラブルもない幸福な一家を狙う意図は何か。そして、具体的にどのような手口で……。周辺取材を続けているわれわれ自身、まったく事件の筋をつかめない。

取材は司法担当を含めた「サツ部隊」が担当している。捜査当局、同僚弁護士への接触に加え、坂本弁護士が直前まで緊迫した交渉を続けていた宗教団体との取材のため、東京、千葉・成田空港、静岡・富士宮と駆け回っている。過去の弁護士を狙った事件の洗い直しも不可欠になった。事件の多い神奈川だけに「デイリーワーク」をこなしながらの人員配置。われわれにとって、広域的な「足」、情報の確保の必要性が端的に現れた。

気の重い取材も多い。無事を祈りながら待ち続けている親族へのインタビュー、そして関係者の気持ちを逆なでするように届けられるニセの情報提供に対しての一応の確認作業だ。「なぜ息子夫婦がこのような事件に……」。坂本さんの母親さちよさんは涙ながらに語った。やり場のない怒り。じっと待ち続けるしかないことへの不安と焦燥。早く元気な孫の姿を見たいという心情が痛いほど伝わってきた。

個人的なことだが、坂本弁護士とは司法担当になって以降約二年間つき合った。とにかく、持ち前の明るさと実直さ、人権感覚の鋭さが彼の持ち味。子供や労働者、障害者など社会的弱者の立場に立ち、マスコミの意義、役割もよく理解していてくれた人だと思っている。定期券にはさんだ竜彦ちゃんの写真を見せ、顔を崩していた坂本さんの表情をときどき思い浮かべ、「われわれに出来ることは何か」と問い直している。その答えは、「事件を風化させまい」という気持ちと、「暴力には屈しない」という報道の「原点」を持ち続けることだと確信し、取材を続けている。

なかむら　たくし氏　一九八四年神奈川新聞入社　三浦　田園都市各支局を経て　八八年から横浜司法記者会

坂本さん一家はこつ然と消えた――特異な事件だけに捜査は難航

「きょうは乗り物大丈夫？」

松元　敦

花の万博が四月一日に開幕して二カ月が過ぎ、これまでに七百万人以上の観客が入場した。数字の上では予想を上回り、順調のように見えるが、各マスコミの報道でご存知の通り、本来の花と緑の話題よりも乗り物の事故のニュースで知名度が上がってしまった。

このため花博プレスセンターに詰めている記者は、事故関連の取材で毎日会場を走り回るのが主な仕事となっており、朝、花博協会の報道課に顔を出し「きょうは乗り物は大丈夫」というのが日常のあいさつになっている。

花博会場には場内の輸送機関として、高架水路をボートで移動する「ウォーターライド」「ロープウェー」、磁性ベルトの上を車両が走る「CTM・パノラマライナー」SL「義経号」の四つの施設がある。事故の幕明けは四月二日。三月三十一日の開会式、一日の開場式と朝早くからバタバタとした二日間が過ぎ、ほっとしていたところ「ウォーターライドから乗客三人が転落し、ケガをした」という一報が飛び込んできた。

現場ではウォーターライドのボートが転落、宙づりになり、ケガ人も最終的には二十四人が重軽傷という大事故になってしまった。

翌日からも現場検証など警察の動きのケアーの取材が続く。一週間が過ぎ、デイリーでのウォーターライドのニュースが少なくなってきた頃、次の事故が起きた。

四月十八日、今度はロープウェーの滑車の一部が欠け、入場客が大勢通行する二十メートル下の通りに落下（その破片は重さが約八百グラム）、人に当たれば大きな事故になるところだったが、幸いケガ人はなかった。しかし原因究明のためロープウェーもストップ。十日後にようやく運転が再開されたが、この間も再開がいつになるかなどの取材が毎晩深夜まで及んだ。

さらにトラブルは続く。パノラマライナーが機器の故障から五月十二日、十九日、二十日と連続してストップ、安全総点検のため三日間運転が中止された。

事故ケアーのためだけではないが、一日一回は必ず会場を回る。ネタ探しをするが、気になるのはロープウェーなどの乗り物。立ち止まって見上げているとよく入場客から声をかけられる。プレスカードを付けているため協会関係者と間違えられ、パビリオンの場所を聞かれたり、時には必見のパビリオンはどこかまで教えることになる。また、記念写真のカメラマンになることもしばしばである。

ウォーターライド事故は現在も警察の捜査が続いているが、運営する企業体と協会では事故原因は人為ミスとして、早い時期の運転再開に向け、安全対策の改善などを進めている。早ければ六月中、遅くとも夏休みに間に合うよう運転が再開される見通しだが、ハード面での原因が究明されない段階で再開を急ぐことについて一部では批判の声も上がっている。

このように事故続きで、本当にこの二カ月間が長かったと感じているが、会期はやっと三分の一が済んだだけで、これからが夏休みを控え、花博も本番となる。炎天下を走り回ることのないように祈りながら、きょうもまた会場回りを続けている。

まつもと　あつし氏　一九七四年読売テレビ放送入社　大阪府警記者クラブ　神戸支局などを経て　現在花博クラブキャップ

開幕2日目に起きた「ウォーターライド」事故

JOC会長交代

ワーキングプレス

異質な取材対象だった堤氏

大山正和

四月の日本オリンピック委員会（JOC）に絡む取材は、とにかく堤義明氏を中心に回った。一九九八年冬季五輪の長野招致活動で論議を呼んでいたアルペンスキー滑降コースの新設断念発言（5日）に始まり、JOC会長の辞意表明（12日）、そして古橋広之進氏が浮上した新会長人事問題（15日）と、運動面を離れて一面、三面、社会面へと展開されるニュースの三連発。今、思えば、このいずれもすべて、堤氏がかかわっていた。

こうしたニュースを特ダネにできた社はあったし、逆に言えば、必然的に抜かれたところも多数出た。ただ、タチが悪かったのは、これら一連のスクープが取材を積み上げた結果、引き出せた性格のネタではなかったことだ。奥歯にモノがはさまった言い方だが、堤氏の〝気配り〟の恩恵にあずかったところと、そうでなかった社がテーマによって異なり、ある時はニンマリした社が、ある時は慌てさせられたのではないだろうか。

〝激動の一カ月〟だったが、堤氏がJOC会長を去った今、われわれの間には〝祭り〟が終わった時の、ある種の寂しさが漂っている。堤氏には『不沈戦艦』のイメージがあった。ご本人にとって迷惑な話だったろうが、だからわれわれは思い切りぶつかり、批判記事を書いた。アマスポーツ全般を取材する日本体協記者クラブにとって、堤氏はこれまでの取材対象とは全く異質な、ぶつかり甲斐のある相手だった。その『不沈戦艦』が沈んでしまった。いずれ浮上してくる『潜水艦』であってほしいという無責任な期待も最近、われわれの一部には出てきている。

JOC会長辞任の背景は既に新聞、週刊誌等で書き尽くされた感がある。長野冬季五輪招致に絡む岩菅山のスキー滑降コースの新設問題、軽井沢のゴルフ場開発における堤氏の企業に対する住民グループの告発……といった、『企業人・堤氏』への一連の批判が辞任への決定打だったと理解している。ただ、ここでは多分に情緒的に、堤氏の辞任につながる、スポーツ界で起きた『ボタンのかけ違い』を分析してみたい。堤氏の、大物ゆえの悲劇を見た。

堤氏の印象からは、アンデルセン童話の『はだかの王様』が連想されてくる。存在があまりにも大きすぎたため、周囲が気後れし、堤氏にとって聞き心地のいい情報しか伝達されなかったのではないだろうか。JOC内部の正確な情報が少なかったために、堤氏が判断を迷わせ、狂わせた部分がかなりあった気がしている。また、誤った判断を下した場合、それに意見する関係者も少なかった。

アマスポーツ界が結局、堤氏に期待していたのは財力であり、政、財界への影響力だった。堤氏のスポーツマインドは理解せず、アマスポーツ界は堤氏を〝仲間〟としては見なかった。その名前の力にすがろうとしただけだった。社会的基盤の弱い日本のアマスポーツ界が実力者を待望することは理解できなくもないが、こうした雰囲気に堤氏自身が、いささかうんざりしていたことは想像に難くない。『二百十日』にやってきて、『二百二十日』に去っていく宮沢賢治の『風の又三郎』ではないが、在任期間約九カ月だった堤氏も、それに似た強烈なインパクトをJOC、そしてわれわれに与えてくれたと思っている。

体協クラブ詰め記者にとってぶつかり甲斐のある堤氏だったが（4.12　辞意表明会見）

おおやま　まさかず氏　一九七六年共同通信入社　大阪支社を経て　本社運動部　現在体協記者クラブキャップ

盧泰愚韓国大統領昼食会

大きな拍手の中，にこやかに入場する盧大統領

クラブ史上、最も厳重ともいえる警備態勢の下で開かれた昼食会となった。出席者はカメラマンや九階のモニター取材、十一階の取材席を含め、事前に登録のあった二百九十五人。出席者全員が日本プレスセンターの玄関と会場前の受付で、二重、三重にＩＤチェックを受けた。

盧大統領の訪日は日本側の事情でこれまで二度延期され、〝三度目の正直〟でやっと実現した。クラブもその度ごとに在日大使館や外務省、警備当局との打ち合わせを繰り返してきた。

五月二十六日（土）正午過ぎ、大統領は予定より若干遅れて到着した。九階の貴賓室で水上理事長、犬養、藤村両副理事長らとあいさつを交わし、記念署名。昼食会が一時四十五分までと通常より短いため、休む間もなく十階の会場へ。

八七年九月、民正党党首としてクラブを訪れた時より、髪が少し白くなっただろうか。しかし、柔和な物腰と落ち着いた雰囲気は変わらない。

ものすごいスピードで昼食を済ませた後、水上理事長がまず「大統領として再びクラブを訪れるという約束を守ってくださいました」と紹介、会場からは大きな拍手がおこった。

冒頭のスピーチは六、七分。前日の国会演説同様格調が高く、訪日を総括するにふさわしい内容だった。大使館側が事前に和文・英文のテキストを用意したため通訳を省略、「質疑応答の時間を十分に」というクラブ側の要望にこたえた形となった。

大統領は今回の訪日について「すべての出会いは温かく有益だった」と高く評価したうえで、「新しい世紀を迎えようとしている今、韓日両国はアジア・太平洋における最も親密なパートナーであらねばならない」と強調した。また「我々は歴史の真実の前に、厳粛であらねばならないが、過去が現在と未来を縛る足かせであってはならない。勇気と信念によ

数字に見る盧大統領昼食会

盧泰愚・韓国大統領の昼食会開催に当たって、外務省はじめ、警備当局、在日韓国大使館、韓国の先遣隊などなどと、何回打ち合わせ会を持ったのか。今となっては正確にカウントできない。

カウントできた数字で、このビッグ・イベントを振り返ってみると――

○……目ざとい方ならお気づきのことと思うが、五月二十二日（火）から日本プレスセンタービルのいたる所に、『確認済』のシールがベタベタと張られた。その数千六百枚。警備当局が不審な物がセットされていないかをチェックした後、張り付けたものだが、はがすのもひと苦労したようだ。

○……警官二万人を動員、と報じられた空前の警備態勢。昼食会当日はどうだったかと言うと、日本プレスセンタービルの前の道路には、機動隊三個中隊を含む約四百人がガード。また、ビルの館内には、日本側約百八十人（機動隊一個中隊を含む）、韓国側約二十人、計二百人もの警備陣が入った。

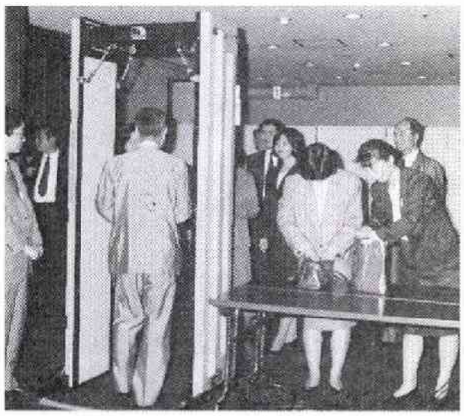
一九八一年十月十四日のアラファトＰＬＯ議長会見時と同規模の警備要員が動員された格好となった。

○……二百五十人規模の昼食会とあってレストラン「アラスカ」も、選び抜か

って、それを断ち切らねばならない」とも述べ、新時代に向けた日韓両国の友好協力関係の重要性を指摘した。

質疑応答では、五月二十四日の天皇の「お言葉」問題と訪韓招へい、在日韓国人の法的地位および被爆者問題、南北朝鮮の統一問題、在韓米軍撤退とアジアの軍事問題、日韓経済関係など五人の質問に、ひとつひとつていねいに答えた。

淡々とした口調で答えていた大統領がちょっと厳しい表情を見せたのは、「日本は謝罪した。韓国も今後は反日的な教育は控えるようにすべきではないか」との質問が出た時。会場内も一瞬どよめいた。しかし大統領はゆっくりと力強く答えた。「一部にそうした心配をする人がいるかもしれないが、大切なのは歴史の真実を共に認識すること。ヨーロッパを見てください。かつて敵同士として戦った独、英、仏が統一に向かっている。その原動力は、歴史の真実を共通に認識したことにある。こうした認識が固くできれば、心配は自然の流れとして解決していくでしょう」。



会場入口には，金属探知機も

終了後、水上理事長は大統領の記念署名を高々と上げて披露した。三年前のサインはハングル語で「夢も痛みも国民と共に」だったが、この日は漢字で「真実一本」。

恒例の記念品贈呈の後も、大統領の人柄をにじませる言葉がとび出した。

「三年前、同じようにペンのおみやげをいただいた時、『ペンは剣より強し』と申しあげた。文武を比べ、みなさまの方が強いと言ったわけですが、今日は『無』の字を残したい。きれいに心をあかす、無の心でものを考える。私の座右の銘でもあります」

拍手に送られて、大統領はにこやかに手を振りながら退場、その後、霞が関インターで夫人と合流し、羽田へと向かった。

（昼食会でのスピーチ、質疑応答は次号記録版に収録の予定。）

れた〝戦力〟を投入してくれた。当日の料理担当十六人、サーブ担当四十人。この人たちも、早朝、金属探知機を〝くぐり〟、ネームプレートのほかブルーリボンのIDをつけて仕事に当たったが、突然、韓国の〝お毒味役〟が調理室に入る一幕もあって、これにはコックさんもビックリ。

○……二月二日の五党党首公開討論会の時と同様、今回も会場のスペースの関係から、テレビ、スチール、ラジオに関しては、代表取材にしてもらった。その取材陣は、生中継をしたNHKが十八人、スチールカメラは東京写真記者協会代表八社八人、外国通信社代表二社二人、ラジオ一社二人。ENGは、日本、外国ともそれぞれ一社二人。一方、韓国側からは、ムービー一社三人、ENG二社四人、スチール四社四人。取材エリアはクラブで決めさせてもらったが、中継用のヤグラが意外に大きく多少混雑した。

○……昼食会の模様は、当日午後零時三十五分から一時四十五分までNHK（総合・衛星）で生中継されたが、視聴率は八・二％と高かった。ちなみに関連の視聴率は、五月二十四日の歓迎行事（迎賓館）は四・一％、宮中晩さん（皇居）は二一％、二十五日の国会演説（衆議院本会議場）は三・一％だった。

クラブゲスト

完倉　寿郎　軍事評論家

5.10（木）研究会
「ソ連・東欧」(24)
司会　木村明生委員
出席　80人

シシクラジュロウ氏のクラブ登場は二度目で、今回のテーマは『ペレストロイカとソ連軍』。

発表数字を綿密に分析し、「グラスノスチ（情報公開）によって、軍関係についてもいろいろな事柄が明らかにされるようになったが、公開された数字＝具体的な真実ではない」。また、「最近、ソ連軍の中で武器の盗難が増えている」実態を詳細に指摘し、「ソ連軍の責任観念が欠如してきている」。一方、「軍が国民から軽べつされている」とも。

質問に答え、「徴兵制だけではうまくいかないことは確か。現在、志願兵制との組み合わせを議論している」また、党に対する反発は強いものの、「軍が組織体として、党に抵抗できるとは考えにくい」。「軍はゴルバチョフを引き落ろすことはできないが、ゴルバチョフは長続きしない。再選は疑問」と言い切った。

ニコラス・リドレー　英貿易産業相

急きょ、中山外相への表敬が入り、三十分遅刻。急いで昼食をとり、その後のオープニングリマークスの中では、「開放貿易体制を維持するため各国は具体的な政策を推進する必要がある」ことを強調、日本国内における関税、輸入数量制限、投資規制などをさらに改善・改正するよう要望した。

一方、〝乗用車の輸入問題〟については、「ECが市場統合後、暫定的に輸入規制措置はとるとしても、域外メーカーが域内で生産した乗用車まで対象とすることには、あくまで反対」とした。

ウルグアイ・ラウンド成功に向けて日本も役割を果たしてほしい、と述べ、コメに関する質問に、「まず、各国の農業保護のレベルを明らかにすることが大事。それを指数化できれば、その後、どのようなペース、方法で撤廃すればよいのかハッキリする。問題の解決は可能だ」。

5.15（火）　昼食会
司会　小林光治委員
通訳　森　由美子
出席　59人

ハンス・J・ハリーヤ　西独大使

5.17（木）　研究会
「ヨーロッパとドイツ問題」
司会　伊藤光彦委員
通訳　シュルテ参事官
出席　92人

出席者の理解を助けるために、と予定を変更して冒頭のスピーチを英語で行った。「統一ドイツの公用語が英語になるということではないでしょうが」との司会者の紹介には、少しほほえんだだけ。約一時間にわたって、ソ連のペレストロイカを振り出しに、軍事、経済面からドイツの統合問題について語った。

軍事面では、NATOとワルシャワ条約機構が政治的性格を強める中で、「対立構造のなくなった欧州で、東独の安全保障上の地位を探すことになる」と言う。経済面では、「通貨同盟（七月二日）は、市場原理に基づいた統一通貨地域でなければならない。これは西の経済体制を東が受け入れることを意味するもので、計画経済と自由経済との間の第三の道はない」。また「懸念される失業対策を含む社会制度改革がうまくいけば、五〇年代の西独のような高い経済成長も可能」。

グン・ノイマン　スウェーデン
男女平等オンブズマン

スウェーデンで『労働における男女平等に関する法律』が施行されたのは一九八〇年。同時に、この監視役として世界初の『男女平等オンブズマン』が任命された。その二代目。「この十年で働く女性が大幅に増え、職場の状況もかなり改善されたが、まだまだ不十分」と語る。オンブズマンの役目は、職場における機会平等を保障し、助言を求める人たちの相談にのることで、時には個人に代わって提訴することもある。「オンブズマンは、平等推進のシンボルなのです」。

昇進、給与格差に関する苦情が最も多く、男性からの申し立ては全体の一五%。「どうも男性は、〝男〟というだけで、同じキャリアの女性よりも自分の方が優れていると思うらしい」。

珍しく会見出席者の三分の一が女性記者だったが、「ラウンジやレストランが男性ばかりでびっくり」とも。

5.18（金）　記者会見
司会　江口　浩委員
通訳　西村好美
出席　41人

クラブゲスト

大内　啓伍　民社党委員長

5.22（火）　昼食会
司会　川内一誠委員
出席　78人

「党の再生をはかり、中道勢力の構築に向けて先導的な役割を果たしていくことが私の任務」――就任後一か月を迎える、新生「民社丸」の船長は、意気軒こうとして民社党の役割をアピールし、高いトーンで、これからの政局、消費税問題、選挙制度問題について語った。

消費税については、〝一つの示唆〟と前置きし、「現行・消費税の名称は変わらなければならない。将来の年金医療、福祉といったものを念頭に置いて、間接税に取り組まなければいけない」「福祉目的税というわけではない」とも付け加えた。

また、選挙制度審議会が答申した、小選挙区比例代表制について、「自民、社会の両党以外をまっ殺するもの」と切って捨て、「断固反対」と明言。

民社党の名称変更については、「まずは、現行の党綱領の見直しを行いたい」と結論を延ばした。

イワン・フロロフ　プラウダ編集長

5.24（木）　記者会見
司会　木村明生委員
通訳　徳永晴美
出席　94人

昨秋まで書記長補佐官を務め、現在は党書記を兼任する、ゴルバチョフ大統領のイデオロギー分野のブレーンである。

七月の共産党大会について「誇張抜きで歴史的なものになる」と強調、「党と国民との新しい関係を規定する大会であり、議論は激烈なものになる」と。「しかし、我々は古典的な意味での分裂は欲していない。離党したい人には〝どうぞお元気で〟と言うだけだ」。

北方領土問題については「我々にとっては南方領土だが」と笑ったうえで、「ゴルバチョフ大統領訪日の綿密な準備が始まっている。彼は、交渉の〝巨匠〟。日本のみなさんも、九一年にその巨匠を目の当たりにできるでしょう」。日ソ関係を新しい水準に引き上げるために、解決や合意、討議の継続など、交渉のあらゆる手法が駆使される、との見通しを示した。

曽野　綾子　さん

5.25（金）総会記念講演
司会　水上健也理事長
出席　178人

迎賓館で行われた盧泰愚大統領夫人主催の茶会に出席した後、クラブへ駆けつけた。『表現と時代』をテーマに、和服姿で端然と、自説を述べた。

「むかし小説家も新聞記者も恥多い職業だった。しかし職業選択において〝賤民の誇り〟があった。それがカッコイイ職業となり〝差別〟を受けなくなった一方で、勇気というものを失った」「一時期の中国偏重報道は、生きてきた時代の恥として記憶すべきだ」「新聞のヒューマニストぶった、いい子ちゃんぶりには、ウンザリ」「日本のジャーナリズムは、〝なぜ〟という問いかけなしに一斉に同じ方向に走り出す」「哲学、思想をもったジャーナリズムを目指してほしい」などなど、曽野さんらしい、ストレートな発言が続いた。

記念署名は、筆でサラサラと「あとは野となれ　山となれ」。これまた、曽野さんらしいと受け取るべきか。

武藤　利昭　前駐ソ大使

5.28（月）　昼食会
司会　阿部義正委員
出席　74人

昼食会ゲストで十六の質問に答えたのはレコードかもしれない。例え話を交え、言葉が次々と口をつく。しかし内容は慎重そのもの。

「ペレストロイカは成功するかと聞かれる度に、『成功』の尺度は何ですか、と聞き返すことにしている」。過渡期に伴う経済的混乱はあるが、なにより政治改革によって社会が明るくなった。「ペレストロイカの海に乗り出したが、天候が悪い。乗組員は口々に右だ、左だ、真っ直ぐだと言うが、元に戻れと言う人も、オレが代わって船長になると言う人もいない」。

ソ連の新聞で領土問題を取り上げていることには意味がある、としながらも「ソ連の軟化を言うには早すぎる」。ゴルバチョフ大統領の訪日は日ソ関係にとって画期的なものだが、「〝お土産〟は期待できない。訪日が物ごとのスタート。日本という国を見てもらうだけでも成功だ」と言う。

連載27

世界のテレビ ＝インドネシア＝

“指名手配”の放映も

磯松浩滋

インドネシア国営テレビ（ＴＶＲＩ）のアナウンサーは、ニュースを読み上げるに当たって、まず「バル　バル　イニ」と始めるのが普通だ。その意味は「最近（何なにが起きました、ありました）」。つまり、この国ではその日に起きたニュースが、その日の内にテレビ報道されることのほうが珍しい。「いつ」という日付が明示されることも少ない。

ニュースといいながら、ちっとも新しくないのだ。例外は、大統領官邸を中心にしたスハルト大統領が登場する各種行事だ。これは、その日の内に放映されることが多い。大統領による年頭の予算教書発表と八月の独立記念演説は、特別に国会からライブ中継されるが、一般の国会審議は放映されない。

国営テレビは、一九六二年から放送を開始した。テレビ普及台数は約六百万台（一九八八年、中央統計局資料）。ざっと国民三十人に一台の割合になる。昨年から首都ジャカルタ地区を対象にした、初の民放テレビ、ＲＣＴＩが放映を始めた。大統領の次男が率いる企業グループの経営で、利用世帯は約二十万。米国製の映画など娯楽番組が中心。このほかインドネシア第二の都市スラバヤ地区でも民放テレビの計画があるが、圧倒的な地域で、テレビは国営の一チャンネルだけだ。

国営テレビの番組は歌やクイズなどの娯楽物、各地の開発状況を伝えるシリーズもの、農民向けプログラムなどに大別される。人気はポップス番組だが、全体として同テレビの職員自身が打ち明けるように、「予算が少なくて面白いものがない」状態だ。番組の八割は自主製作。

高視聴率を稼いでいる例外は、一九八七年から週一回放送されている「おしん」。とくに主役が小さかったころは爆発的人気で、放映時間帯は人通りが絶えるとまでいわれた。貧しさ、苦しさに耐える姿を、現在の自分たちの暮らしとダブらせて見る人が多い。この六月で終了する。次は、やはりＮＨＫの朝の連続ドラマだった「はね駒」を放映予定。「おしん」は英語吹き替えでインドネシア語の字幕が出たが、「はね駒」では直接、インドネシア語の吹き替えで放映される。

退屈な国営テレビにかわって金持ち層でこの三、四年のブームになっているのが、直径三メートルもあるパラボラアンテナを自宅に設置して、タイ、シンガポール、マレーシアの番組を直接楽しむことだ。このパラボラアンテナは新たなステータス・シンボルにもなっており、ジャカルタの高級住宅街ではその大きさを競うように、隣同士でアンテナが向かい合い、空をにらんでいる光景が見られる。このアンテナでスラバヤでは、日本の衛星放送も受信可能だ。

ところで、国営テレビで今年一月からちょっと異質な番組が流れている。毎週月、木曜のニュースの後に公金横領、収賄、密輸などに関係して指名手配中や、裁判中の役人の顔写真が容疑内容とともに映しだされるのだ。正規の給与が低過ぎるため、公務員は上から下まで様々な「アルバイト」に精を出しているのは公知の事実である。それにしても余りに不正な公務員が多過ぎるとして、一掃キャンペーンとして検事総長の音頭取りで顔写真放映が始まったわけだ。

テレビニュースで犯罪や裁判経過が報道される習慣がなかっただけに、注目を浴びた。「不正な輩には法的制裁のほか、顔写真が全国に流されるという社会的制裁も受けさせる」と検事総長は番組の狙いを説明する。日本以上に「面子」を重んじる傾向をもつインドネシア社会をからめ手に取ろうとの戦略だ。

その成果は？五月までに三十三人の顔写真が放映された。十五人が逃げ切れないと警察に出頭したり通報で逮捕されたという。同一人物が繰り返して放映される。「狙いはわかるが小物ばかりでうんざり」との市民の声に、当局は「繰り返すことが大事。通報も多くなる。放映用の不正公務員が足りないのではない。ストックは山のように控えている」と、誇るには恥ずかしい在庫の豊富さを強調。小物ではない巨悪の取り締まりを望む市民感覚とはちょっとズレている。

いそまつ　こうじ氏　一九七八年朝日新聞入社　社会部　外報部を経て　八八年からジャカルタ特派員

国営テレビＴＶＲＩの放送時間帯は，原則として月曜から土曜が午後4時30分から同11時過ぎまで。日曜は午前から。夕方にニュースも含めて30分間の英語放送がある。1978年からカラー化。国民に人気のあるサッカー，ボクシングの海外試合は特別番組で放映することが多い。

ジャカルタ周辺地区で視聴可能な民放テレビＲＣＴＩの放送時間帯は，週日が昼過ぎから翌日未明まで。週末は午前から。視聴料金は毎月30,000ルピア（約2,400円）。ちなみに中堅大卒公務員の月給は150,000ルピア。

プロフィール

◇個人D会員

五月一日付入会の個人D会員、法人・個人賛助会員の方々です。

ゴルフの会

吉岡秀夫会員が優勝

第五十五回ゴルフ会が五月二十一日（月）、横浜カントリークラブ東コースで行われた。

参加者二十七人が熱戦を展開、毎回上位入賞している吉岡秀夫会員（テレビ朝日ＯＢ）がグロス84、ネット73で初優勝、ベスグロも合わせて獲得した。また芝辻正昭会員（ＮＨＫＯＢ）がネット70を出したが初参加のため二位、三位は山本道雄会員（毎日放送ＯＢ）のネット78だった。

午前中から雨が降り続き、腕自慢の会員たちも苦戦の連続。二ケタがわずか六人と少々淋しい成績。

プレー終了後の懇親会兼総会で八九年度の決算報告が承認され、幹事四人も再選された。

次回は十月に予定。

会議報告

第178回企画委員会（5・8　記者会見室）

前回からの行事報告の後、今後のクラブゲストについて協議した。

出席　平野委員長。村上、阿部、石川、広瀬、江口、高橋、田畑、川内、宮智、酒井、村野、マッジの各委員。

第112回会報委員会（5・10　第2会議室）

五月号について意見交換した後、六月号の編集について協議した。

出席　深川委員長。池浦、今城、林の各委員。

第153回会員資格委員会（5・15　第2会議室）

六月一日付の会員入退会を審議し、理事会へ答申した。

出席　松山委員長。川戸、金子、曽我、青木の各委員。

第70回施設運営委員会（5・24　第2会議室）

試写会メニューの利用結果、四、五月のアラスカの売上および貸室実績などについて事務局から報告した。

出席　近藤委員長。中空、和田、小松原、宮地、樋口の各委員。

寄贈書

世界年鑑'90　共同通信社
記者ハンドブック　〃
新・法と新聞　日本新聞協会
取材と報道（改訂2版）　〃
新聞産業の経営動向予測　〃
一九九〇年版
State of the World 1990　ワールド・ウォッチ・インスティチュート　〃

来訪者

五月九日　ハシミ・ダウイ　チュニジア大使館二等書記官

ゲストカード

第13回ＡＳＥＡＮ記者研修（新聞協会　6・7～7・17）Ｏ・シマンジュンタック（インドネシア　国営テレビ）　ウィドド（同　ピキラン・ラヤット紙）　Ｈ・シナメラタ（同　ヌラチャ紙）　Ｌ・Ｅ・パク（マレーシア　南洋商報）　Ａ・Ｒ・ラジス（同　ニュー・ストレーツタイムズ紙）　Ｃ・Ｓ・ファン（同　通報）　Ｍ・Ｓ・Ｒ・オカンポ（フィリピン　マニラタイムズ）　Ｊ・ソーホー（同　チャンネル7）　Ｊ・Ｐ・ディノ（同　バリタ紙）　Ｎ・Ａ・アーラック（シンガポール　聯合晩報）　Ｒ・アーマッド（同　ニューペーパー紙）　Ｈ・Ｋ・コクジュイ（同　聯合早報）　Ｓ・チャンガオ（タイ　プラチャチャット・ビジネス紙）　Ｐ・ラートキッティーサック（同　バンコクポスト紙）　Ｎ・ソンプラスィッチ（同　タイ・ラート紙）

写真回廊

写真　黒田　耕一（1980年日本経済新聞入社）
（5月初旬東欧諸国を取材）

新生「共和国」の祝日

ポーランドの五月三日は、ことしから祝日になった。ワルシャワの街頭を、マーチングバンドやマスゲームの隊列が行き、マゾビエツキ首相も姿をみせて、市民の歓呼にこたえた、と黒田カメラマンの話だ。

かつての「人民共和国」では七月二十二日が国の記念日だったが、新生の「共和国」は、一七九一年、きわめて民主的な憲法を制定した歴史的なこの日を記念日にした、とこれはポーランド学者の話。

記念日前日の二日には、西ドイツのワイツゼッカー大統領がはじめてポーランドを訪問。戦中のドイツ軍による侵略と残虐行為を謝罪し、現国境の尊重を明言した、とこれは新聞のちいさな記事。

ことしは、例のショパン・コンクールもある。日本の旅行社数社がその会場の席を押さえたらしく、ポーランドの人が怒っているとの話が伝わってきた、とこれはピアノ演奏会で音楽評論家との立ち話だ。

コンクールへの出場者も、日本がいちばん多い。五年ごとに開かれ、前回は天才ブーニンで日本は大騒ぎした。ゴルバチョフ書記長が登場した年でもあった。

あれから五年。ポーランドの人びとはいま、物価引き上げと賃金抑制で苦しんでいるという。どうも、日本人が気になる。

（酒井　寛）

南信日日新聞社が入会しました

第一七二回理事会（五月・書面）で、南信日日新聞社の入会が承認されました。登録会員は左記の方々です。これで法人会員社数は新聞・通信＝七九社、放送＝六四社、団体（新聞協会、民放連、日本プレスセンター）＝三社、計一四六社になりました。

法人会員　南信日日新聞社
〒392　諏訪市高島三―一三―三
TEL　〇二六六―五二―二〇〇〇

東京支社　〒104　中央区銀座六―六―七　朝日ビル
TEL　五七一―二一四五

法人代表　高山　茂　代表取締役専務編集担当兼業務局長
基本会員　大石三津子　東京支社長

ロッカー利用についてのお願い

ラウンジとレストランの入口近くにあるロッカーは数が十分ではないため、お一人での長期にわたるご使用はご遠慮いただいております。よろしくご協力願います。

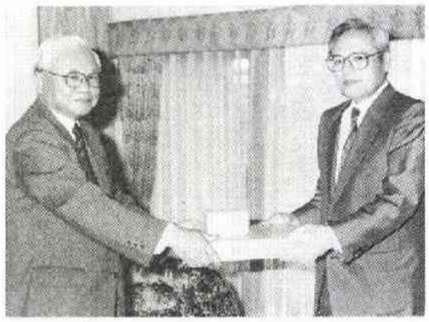
会員の著書

誤報と虚報　後藤文康
（岩波ブックレット　三一〇円）

中欧の復活　加藤雅彦
（日本放送出版協会　七八〇円）

国際化日本の壁　卓南生
（東洋経済新報　一、四五〇円）

将棋連盟が将棋盤セットを寄贈



日本将棋連盟から、将棋盤と駒、それに駒台各二セットが当クラブに寄贈され、五月一日、同連盟二上達也会長（**写真右**）、中島信吾渉外・手合課長により手渡されました。

これまでクラブにあった盤、駒とも創立時からのものでいたみがひどく、新調するために日本将棋連盟にあっせんを頼んだところ、快く寄贈してくれました。新しい盤は新カヤの卓上型、駒はツゲの彫駒。アマチュアが使用するには最良のものです。

二上会長は「日本記者クラブの皆さんに使っていただければ、将棋普及の一助になる」と話していました。

ドライ・マティニはいかがでしょうか

アラスカの五月の異動で、吉冨学（よしとみ・まなぶ）前取締役営業部長が、顧問格でクラブ担当になりました。間髪を入れない鍛え抜かれたサービスぶりで着任当日から大活躍ですが、本来はワインやカクテルが専門です。特に吉冨さんのドライ・マティニは絶品だそうですから、機会をみてお試しください。バー、ラウンジ担当として小口博章（おぐち・ひろあき）主任も加わり、連休明けからアラスカは新陣容でサービス向上に努めています。

訃報

斎藤基会員（ニッポン放送）が五月十一日脳出血のため、藤井寛会員（共同通信）が同十九日大腸がんのため逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

×　×

レストランアラスカの料理長を五十九年間務めた飯田進三郎さんが、四月十二日逝去されました。飯田さんは、クラブがレストランをオープンした際、若いコックさんたちを指導し、基礎固めをしてくださいました。その後も大型の昼食会やパーティーがあると、大阪から上京してお手伝いくださいました。

会員現況　法人会員　一四六社　基本会員　六四六人
個人会員　一、五九九人　法人・個人賛助会員　七三社　二三九人　特別賛助会員　七一人　名誉会員　一人　計　二一九社　二、五六九人

六月の行事（7日現在）

13日（水）午後1時／2時30分　**竹下　登元首相**記者会見

19日（火）午後4時／5時　**サリナス・デゴルタリ　メキシコ大統領**記者会見

26日（火）正午／午後2時　**覚　栄一検事総長**昼食会

［行事案内電話　五〇三―三七六四］

会報委員長＝深川　誠
委員＝池浦正彦　出田　裕　今城力夫　林　利隆
連絡＝長谷川　河野（事務局五〇三―二七二二）